平成２５年度研究成果報告書《平成 25 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	２５	都道府県・指定都市名	滋賀県
ふりがな **学校名**（生徒数）	しがだいがくきょういくがくぶふぞくちゅうがっこう 滋賀大学教育学部附属中学校（３５９人）		

（本研究に係る問い合わせ先）

所在地：〒520-0817　滋賀県大津市昭和町１０番３号　電話番号：077-527-5255

研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：http://www.fc.shiga-u.ac.jp/

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：３中学校　　○研究対象教科等：総合的な学習の時間

○研究のキーワード：問題解決，思考力･判断力･表現力，交流，議論，思考ツール

○研究成果のポイント日本の学校は世界トップ級の成果を上げているのに「子どもの問題解決の力が弱い」「子どもが学んだことを生かせない」と指摘される。そこで本校は 30 年続けてきた調査研究型総合学習「BIWAKO TIME」（以下 BT）を〝問題解決場面を経験する試合〟に位置づけ直し，また BT に「情報の時間」を補って〝試合でのつまずきから学ぶ実戦練習〟とする一方，各教科では思考ツールなどを使って各自の「判断」を生徒相互でみがき合う授業場面を増やした。その結果，生徒も指導者も授業で議論を深めやすくなり，全国学力・学習状況調査で「無答率の低下」「低位層の減少」という波及効果も確認できた。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

思考と表現をつなぐ「判断」のありように着目した学習指導研究
～思考ツールなどを活用し協同的に学び合う過程の実現を通して～

（２）研究主題設定の理由

本校では異学年混成４～８人でのグループ研究 BT （開始時は「びわ湖学習」）を 30 年実践し，情報教育にも早くから取り組んできたが，インターネット普及後は生徒が web の情報を鵜呑みする傾向が目立っていた。そこで，平成 22～24 年度に研究開発学校として「情報の時間」を特設したが，肝心の BT のポスターセッションや発表会では質疑応答が活発でなかった。ゆえに本年度は「総合的な学習の時間」内に BT と「情報の時間」を位置づけ，生徒の「判断」に着目し，思考ツールなどを活用し協同的に学び合う過程で「より的確に判断する力」を高め，生徒の「より深い思考」や「より適切な表現」を引き出そうとした。

（３）研究体制

・校務分掌を３事業部に整理し，小規模校ながら研究部に７名を充て，チームで推進した。
・BT と「情報の時間」の関連を，年度当初に明らかにし，計画的に実践を進めた。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	通年／前期	全学年で20時間程度「情報の時間」を実施／全学年で24時間程度BTを実施
	４～５月	BT・情報の時間での実践内容を議論（特に判断力向上方策）
	５月13日(月)	担当官招聘，BT・情報の時間視察，研究内容へのご指導
	６～７月	BT・情報の時間における実践期間①
	８月	本校「研究協議会」における中間報告と議論（①成果の発表）
	９･10／11･12月	BT･情報の時間における実践期間②／研究成果のまとめ，報告書執筆検討
	３月末	報告書提出，本校研究紀要に成果を掲載，本学学術情報リポジトリで公開

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

・研究部内に BT・「情報の時間」等の各運営担当者を置き，授業のポイントを各職員に発信し，指導記録や指導上の課題を各職員から集約して，研究推進の円滑化を図った。
・毎月２回校内研究会を行い，校内研究の起案，議論，企画，運営，省察を年間を通じて連

続的に行いつつ，学外から講師を招き，研究に助言をいただいた。また，研究部会は敢えて校内研究会の「後」に開催することを増やし，職員全員の議論への参加感を高めつつ，生徒の実態に即した企画立案をするよう努めた。

・BT の「探究の過程」で毎年どのような課題が生じるかを時系列で書き出し，それぞれに有効な「情報の時間」単元を選び，「探究の過程」に沿って同時展開した。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

1.総合的な学習の時間において生徒に〝問題解決場面を効果的に経験〟させるためには，次の４点が重要であることを，実践を通して具体的に示した。

①探究活動導入期での「テーマ」指導の強化

・「○○を調べたい」では丸写しの調べ学習に陥るので，調べたいテーマを「○○が□□なのはなぜか」という問いの形で書き出させ，仮説をもたせる指導につなげた。

②思考の集約場面だけでなく思考の拡散･発想段階での思考ツール活用

・「思考ツール」で抽象的思考の具体操作化を図り，生徒間交流や指導の促進を図った。

・特に生徒がリサーチクエスチョンを立て研究を開始する段階で，ピラミッドストラクチャーや指導者面談を取り入れ，「問い」から仮説を立てて調査に入るよう指導した。

③探究活動への介入･指導の機会の制度化

・探究活動中は生徒個々の進捗状況や悩みを見取りづらくなるため，生徒の活動に適切に介入し指導を加えるため,面談と毎時間末「行き詰まり」報告カードの機会を設けた。

④探究活動を繰り返し自覚的に試行錯誤の練習をさせる機会の確保

・探究の過程は試行錯誤の過程でもあり，一度経験しただけではうまく行かないため，重ねて何度か行う必要がある。「情報の時間」では BT でのつまずきを予想し，BT での活用を意識して授業を行うようにした。また BT の学習成果を発表する場では，指導者が質問のモデルを見せることで，生徒のフロアからの質問を引き出せた。

2.前述の指導改善の波及効果として，各教科等の学習において次の２点が得られた。

①生徒間交流の深化

・意見交流時に指導者が思考ツールを使って整理しながら生徒の意見を板書し，その板書からさらに生徒に意見を求めることが増えた。またそれにつれ，生徒が自発的に思考ツールを使って自他の意見をメモし意見する姿が散見されるようになった。

②「分からないからこそ意見を述べる」ことの重要性の自覚

・かつては，間違えたら恥ずかしいので意見を言わない思春期の生徒の姿が顕著であったが，未解決問題の解決には仮説を述べ試行錯誤を繰り返すことこそが重要であることを自覚するにつれ，正解不正解に過度にとらわれず，徐々に自らの考えを記し述べるようになってきた。その変化は，全国学力・学習状況調査でも確認できた。

（２）研究成果の意義等

社会生活では未解決問題について合意形成を迫られる場面が日々訪れる。そこでは，メンバーが議論し合って既有の知識や方法を出し合い選択し，折り重なる価値観を整理し優先度順に配列して判断を下す必要がある。しかし各教科におけるこれまでの学習は，指導と評価の一体化，指導の系統化などの諸改善により非常に明解に授業展開が図られるようになった結果，既習事項を想起したり選んだり，価値観の選択で迷ったりする場面があまりなく，そのことが「問題解決の力が弱い」「学んだことを生かせない」課題につながっているのではないかと考えられる。本研究の成果は，この課題の解決に大きく役立つだろう。

（３）指定期間終了後の取組

各教科等で生徒間交流を深める具体的方策については,未開発の部分が残っているため,引き続き「思考ツール」の開発ならびに活用に重点を置いて研究を継続していきたい。